

平安朝文学における僧侶の恋

今井, 源衛

<https://doi.org/10.15017/12142>

出版情報 : 語文研究. 37, pp.16-26, 1974-08-31. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

平安朝文学における僧侶の恋

今 井 源 衛

本居宣長は、石上私淑言に於いて、法師に恋の歌が多いのはどうしたわけかとの問いを設けて、こう述べている。

淫欲は仏のいみじき戒なれば、法師の深くつゝしむべき事とはたれもたれもよく知ることにて、今も猶このすぢにまよふをば、よにあさましき事になむすめる。しかはあれど(中略)歌は筋異なる事にて、必儒仏の教にそむかじとするわざにもあらねば、そのしわざのよきあしきなどは、とかくいふべきにあらず。ただ物のあはれをむねとして、心に思ひあまる事はいかにもいかにもよみ出る道也。(略)法師ならむからに俄に俗と人情のかはるべきものにあらず。(中略)色を思ふ心もなかはなからむ。これもとよりさるべきことわりなれば、心に思はむ事は恥べきにもあらず、又とがむべき事にもあらず。又とりはづしてはあるまじきあやまちをしいるも、凡夫なる程はつねの事にてせんかたなし。(中略)人とある中にも、殊に法師は妻をももたらす、この欲を常につゝしむ物にて、いよいよ心には思ひのむすばるべき事なれば、俗よりもまさりて、恋の歌は多

くあはれにいできべき事也。

宣長の物のあはれ論が、文学形成の要因としての人間の自然の情を重んずるあまりに、その向上心や自我克服への努力の側面については、過度に軽視する傾きのある事は、しばしば指摘されているが、ここでもまた同様の感想を我々は抱かされるであらう。仏への信仰に生きることをたてまえとする僧侶にとつて、課題としての煩惱の克服と、人間として免れざる情欲の発動という二重の座標の中で、かれの占める座は常に揺れ動くはずだが、宣長にとつては、後者の自然物としての実存性が前面を覆っているのである。

しかし我々にとつては、この背後の二重の座標軸の作用する力学を、個々の人間や、あるいは個々の時代の中に見極めることが重要なわけで、宣長が言ったことについて、今あらためて平安時代について具体的に考えてみることも必要ではなからうか。

和歌の例から入ろう。たとえば古今六帖二には、「法師」の部があり、九首の歌を含んでいる。そして、その中の四首は左の如くである。

かたちこそみ山がくれのくち木なれ 心は花になさばなり
なん

ものごしに花をうちみて人しれず わびたる心いろめきぬ
べし

苔の袖雪げの水にすゝぎつゝ おこなふ身にも恋はたえせ
ず

今さらにむつごとのねにひきかかり こけの山ちをわすれ
やはせん(むつ―書院部本「むへ」)

作者は、「かたちこそ」は、古今集十七所出で、兼芸法師、「ものごしに」は貫之、「苔の袖」と「今さらに」とは素性である。歌意は説明するまでもないが、第一首「心は花に」とはいわゆる花心で、好色心をいう。第二首「ものごしに」は几帳かふすま越しにで、「花」は女の比喩である。「今さらに」の「むつごとのね」は「睦言」と「琴」とをかけたもの。四首とも、僧侶の身ではあっても、あるいは物越しの美女の気配に胸をおどらせたり、好色の心が動く、あるいは逆に、女のむつごとにかまけて道心を失ってよいものか、などの意を詠ったもの。九首の中の他の五首は、おおむね修行のつらさをうたつたものだが、僧侶の歌といえは、こうして修行のつらさを歌うか、女性に心を惹かれる禁欲の身のつらさを歌ったものなのである。

ところで、この古今六帖の部立ての方法については、しばし

ば漢詩集のそれに做ったところが多いといわれている。しかし一般に中国の漢詩集では、「釈家」「梵門」等に分類せられた作品はすべて超俗・解脱の境地を詠うか、森嚴の寺域を歌うものであって、このように僧侶の恋を材料にすることは皆無といってよいらしい。「法師」の部に、半数に及ぶ恋の歌をとり入れることは、日本独特の現象といつてよいらしいのである。これは果して何を意味するのか。

それについては、順序として僧に要求される道心なるもの性格から考えていく必要があるろう。

二

一体、僧が女と通じてはならぬというのは、一にその守るべき戒律による。戒は、最も軽いのが、仏法僧に帰依する三帰依と五戒(不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語・不飲酒)を守る優婆塞・優婆夷であつて、在家俗体の男女である。つぎは十戒で、これは出家・剃髪の沙弥の姿である。そして、官制の戒壇院で小乗の二百五十戒、あるいは具足戒、あるいは天台の円頓戒(大乘戒)を受けて正式に受戒したものが僧尼令にいわれる僧又は尼であり、これと異つて、勝手に課役を免れるなどの目的で剃髪僧となつた私度僧もまた多かつたという。しかしいづれにせよ、少くとも戒を受けて釈迦の弟子となることが僧たるの意であつて、出家に於いては不淫(女と姦しない)、在家では不邪淫(妻以外の女と姦しない)が、その戒律中に含まれているのである。故に少くともたてまえとしては、妻子と共に自宅に住む者はともかくも、寺院に居住する僧侶にあつては、女

犯は墮落破戒の行為であったはずなのである。往生要集によれば、邪淫を犯した者は死後衆合地獄に落ち、刀葉林の樹頭と樹下の間を永劫に往反して、身を切り刻まれながら、美女に欺かれ続けねばならぬのである。

にもかかわらず、平安朝の僧たちは、右の歌にある通りに、女を恋慕し、仏に仕える身のつらさをおおびらに嘆き続けたのである。

三

僧の恋愛の例といえば、史上有名な道鏡と称徳天皇の故事は奈良時代のことだからさておき、九世紀以降も名高い二条后高子と善祐あるいは幽仙との醜聞もある。角田文衛氏によれば高子と幽仙との関係は事実としてはなかったらしいが、善祐とのことは疑えないとの事である。

こうした醜聞の発生する背景に、この頃からとみにいちじるしくなった仏教教団の世俗化の問題が指摘される。よく引かれる記事だが、権記長保三年正月七日条に、

近代脱俗初発心之時、雖有剃除鬚髮之輩、信心已退、非如初心、空成懈怠、還招誘毀

とあり、多くの人にとって如何に道心を貫くことが困難であったかが察せられる。誘毀を招くとは、その内容は主として情事に拘わることもちろんであろう。

また一面、世人は僧侶の好色心に対して、すこぶる寛大でもあった。枕草子(三巻末)第五段に、

思はむ子を法師になしたらむこそ心苦しけれ、ただ木の端

のやうに思ひたるこそいとほしけれ。精進物の悪しきをうち食ひ、寝ぬるをも。若きはものもゆかしからむ、女などのあるところをもなどか忌みたるやうにさしのぞかずもあらむ。

とある。「木の端」云々は、おそらくは前引古今集所出、素性の「かたちこそ深山がくれの朽木なれ」の歌を連想した語であろうか。年若い僧侶なら、女の部屋を覗き込んだりするのも無理もないといったのに合せて、つぎは、女の方でも美貌の説教僧などに思いを寄せることを述べたあと、

などかはむげに、(説教ヲ)さしのぞかではあらん、あや
しからん女だにいみじう聞くめるものを(枕草子三三三段)

と、女房の側から僧に近づくのも当然のこととしている。両性相惹くのは理の当然ながら、殊に女性の側から云えば、男のひたおもてをあらわに眺めるのは憚られることであるが、相手が説教僧ならば、おおびらに仏を仰ぐふりをしながら、その美貌に見入っておられるわけだ。信仰と異性への牽引とが、一体となつて、女の心を魅惑するのである。

こうした風潮の中から、僧侶が思いがけぬ機会から女性と関係し、あるいはこれを誘惑し、又はわが妻として、世人の非難を蒙るに至るのも自然の成行きである。早く十世紀初頭の三善清行の意見封事十二ヶ条にも、僧の墮落を論じて、

況其国分僧、少人皆是無慚之徒也、蓄妻子、営室家、
力耕田、行商價。

という。官寺たる国分寺僧の年若いものが、俗人同様の妻帯生活を営むさまを難じたものである。またやや時代は下るが、右

記(類徒本)にも、

於「淨行侶栖」誘引漢女唐妃之屬、不憚「乱会之事」間亦

有「其聞、(中略)次称「兒童之乳母」、号「尊親之侍女」

出「入隔屋町」之段、外見非「可然之事」

とあって、僧侶の乱会、淫蕩ぶりを指弾している。辻善之助氏は、平安後期における妻帯僧の実例を多く挙げており、沙石集の一節に、

末代ニハツマモタヌ上人年ヲ逐テ希ニコソ聞シ、後白川ノ
法皇ハ、カクスハ上人、セヌハ仏ト仰セラレケルトカヤ、
今ノ世ニハ、カクス上人猶スクナク、セヌ仏希ナリケリ

とあるのは端的にその事を示すものであり、「問はずがたり」に見える高僧と女房との痴情も、当時の頹廢した宮廷の風俗を如実に物語っている。淨蔵は修驗道中興の祖といわれる人物であつたが、妻子を蓄えていることを人にあやしまれて、天竺の羅什三蔵は法灯を継ぐ者の乏しいのを憂えて、伎女十人に通じて子をませたが、自分もそれに倣うのである、と答えたという。花山院が、出家後各地を修行歴の後に京に帰ってから、それ以前にもまして、好色多淫の生活を送つた心事の裡にも、こうした倒錯した論理が働いていよう。花山院をとらえた密教の即身成仏論と相俟って自己聖化が拡大され、院の狂気がそれをさらに増幅したことも察せられるのである。

しかしこうした僧の墮落について、事態をさらに複雑にしているのは、前にもふれた、在家の念仏持経者、憂婆塞のことであろう。これは在俗の姿で妻子と同居してその生計も営むのである。その精進といい、懈怠というも、要するに程度の問題に

過ぎない。かれらに厳しい戒律を守ることを要求するのは、本来無理なのであり、「聖」と称された者は多くこれであつたと五来重氏は云われる。

たとえば今昔物語集では、下級の僧侶の妻帯生活の例を多く示してくれる。巻十七の第二十五話「養造地藏仏師得活人語」では、因幡国高草郡の国隆寺の別当僧は、その妻を人に奪われるや半狂乱になって八方探し廻つたし、その部下の専当法師もまた妻帯して寺務に従事しているのである。また巻十五の第二十六「播磨国賀古駅教信往生語」・第二十七「北山眞取法師往生語」の二話はともに妻帯した僧侶の話である。前者は沙弥教信なる僧が小庵中に極楽往生し、枕頭に妻子が泣き悲しむこと甚しかったという。文末に「彼ノ教信、妻子ヲ具シタリト云ヘドモ、年来念仏ヲ唱ヘテ往生スル也」とあり、後者は北山の眞取法師がその妻と住み馬牛の肉を喰う有様を述べ、それに続く第廿八話も、「鎮西眞取法師」の話で、かれも妻帯している。巻十四第三十八話「誦方広経僧入海不死返来語」は靈異記下巻第四話を種とするもので、素材の時代は遡るわけだが、その脚色は興味がある。主人公の僧は、

妻子ヲ具セリト云ヘドモ、日夜ニ方広経ヲ誦ス、而ルニコノ僧、銭ヲ貯ヘテ人ニ借シテ、員ヲ倍シテ返シ得ルヲ以テ妻子ヲ養ヒ、世ヲ渡リケリ。亦此ノ僧一人ノ娘有リ、夫ニ嫁ギテ同ジ家ニ住ム。

という有様であつた。これらの「法師」や「僧」が、はたして公に妻帯を許されぬ官度の僧侶であるか、あるいはいわばモグリ私度僧か、又は

在家の沙弥であつて妻帯を公認されていた人々であるか、という厄介な問題もここにはあり、一概に墮落とか女犯とか言い立てることは出来ないのではあるが、そのあいまいな事情こそ、一般に多くの僧侶が恋愛に對してあまり潔癖とは云えない風潮を生み出した原因とも云えるであらう。

四

話を文学の上に引き戻せば、当時の僧侶たちは、歌を詠むにも恋愛を材とする点に於いてまことにくたくがないように見える。例の僧正遍照の

な

にしろ、いかにも闊達な笑いがある。当時の第一人者貫之がこれを歌仙の歌として持ち上げたところにも、僧の恋を笑って受け入れる社会の風潮がうかがえよう。遍照の子の素性も同じく古今集の恋の部に八首にものはる歌がとられている。もともとその中の二首は女の身になつて歌つたものであり、一首は宴席での詠で、大部分はまず題詠歌とみてよいので、素性が實際上女遊びをしていた証拠になるようなものではなからう。それにしても、れっきとした僧侶が歌会や宴席で恋の歌をよみ、あるいは女になり代つて作ると、それが大量に勅撰集に採用されるというのは、当時の僧侶や和歌の世界を考へる上に、軽々しく見逃しえない事である。

勅撰集では、この素性をふくめて、三代集に六人十四首、後拾遺・詞花集では二十四人四十一首となり、平安後朝に向うほ

ど僧の恋歌は増してゆく。それは平田俊春氏の言われるような上流貴族の寺院への進出と、歌壇の盛況という現象に伴うことであらう。

ところで、僧の恋愛を歌人たちはどのように取り扱っているか。先にあげた古今六帖の「法師」の歌にもその一面は見られるわけだが、さらに以下若干の例をあげると、まず為信集に、
入道といふものいみじう思ふを、女いとひてあはぬ
を、ある人入道に代りて、

ただならでいでにし家のかみなれど　なほ夕つけてさかきとりてん

かへし、さかきに代りて

さかさしやしろがまへに祈るとも　さらに聞きいれじかみなびのもり

ある僧がさかきという名の女を恋したが、女は嫌っている。

「家のかみ」に「神」「髪」を、「ゆふつけて」に「夕」「木綿」を、「神南備」に「髪無」をそれぞれかける。「あなたを夜になったら手に入れるつもりだ」とおどかすと、「いくら懇願されても、坊主のことなんか聞くものですか」と返したのである。一般に僧が女から嫌われがちだったとは云えようし、特に「法師の色好むをにくし」（重之集、詞書）という感情は一般的なものだったと思われる。また同じく為信集に、
見えがたき女の法師とふしたるを見て、はちしめしに、
いみじう泣けば、いとをしうて、つとめて、

ねがたしと思ひけるかなかみながも　はかなくおつるものにぞありける

かへし

よひのまにおつといひしはいつのまに　しのびあまりしな
みだなるべし

詞書中にある「はぢしめしに」は、女が自分を裏切ったことよりも、寝た相手が僧だったという事に特に拘わる語のようである。男の歌の意は、「今迄なかなか共寝のできない人だと思つていたが、僧侶にだつてあつてなく陥落してしまふとはね」(「髪長」は、僧侶の意の忌みことば)。女は「私が落ちた、などとは聞えの悪い。落ちたというのはこらえ切れなくなつてこぼれ落ちた私の涙のことでしょう」と答えるのである。

ついでながら、こうした男僧の情事ではなく、尼僧の情事からかう歌もある。仲文集に、

堀川の中宮うせさせたまひて、中宮の典侍・宣旨など
尼になりたるもとに、
仲文

かまへつつさてもありつる世をそむくうしろでもぞ思ひ
やらるる

歌意は、「これまでは、いろいろの男を相手に工夫してうまくやつて来なすつたが、これからは、どうも男気がなくては、後姿も淋しそうで思いやられますなあ」である。

かよひし女、尼になりけるに、

今はなほふところ広き衣手に人をはぐくむ心あらなむ

「これからも、従来同様、袖の広い僧衣で私を抱いてほしい」というのであろう。仲文は、前にも別稿で述べたことがあるが、よほど悪達者でからかい好きな男である。それにしても中宮に荷じて出家した女房たちや、自分の妻の一人であった女の出家

に際して贈る歌としては、何とも度を外れた意地の悪いしんらつさではある。しかし源氏物語の帯木巻の兩夜品定めに出る、「額髪かきさぐ」る女のように、一時の気まぐれで衝動的に出家し、あとから後悔したり、尼生活に堪えられずに浮名を立てられる例も多かったわけだから、仲文のからかいが全くの見当違いというわけでもなかった。現に定子中宮のように高位の身であっても、尼姿となつてからみごもる例もあったのである。僧尼の恋を材料にした和歌は、必ずしも多くはないにせよ、それらには、仏罰を惧れ、愛欲と信仰との分裂に苦しむといった主題はほとんど見当らない、そうした信仰の問題は釈教歌の荷うもので別らしいのである。

五

王朝の物語にも、僧の恋を扱ったものは、珍しくない。その好例は大和物語であろう。その第四十二〜四十四段には、姦しうという僧が高貴な女性の祈禱師をつとめているうちにただならぬ仲となり、世間の噂に居たたまれず、横川の山中に入つてしまふ話である。簡単にその成りゆきと歌とを記しながら、僧に対する他からの非難がましい口吻は皆無で、むしろ逆にこの僧の恋愛に共感的である。

里はいふ山にはさわぐ白雲の　空にはかなき身とやなりな
む

まがきする飛弾のたくみのたつき音の　あなかしがましな
ぞや世の中

共に、世人の口のうるさいことに眉をしかめた歌だが、四段を

一貫して、この主人公の僧の心事に密着した記述である。また第六十二段は、先に述べた浄蔵と「のうさんの君」という女性との恋の贈答歌である。

思ふてふ心はことにありけるを 昔の人に何をいひけむの
うさんの君

ゆくすゑの宿世を知らぬ心には君にかぎりの身とぞいひける
(浄蔵)

「人を恋するとは、こういうことをこそいうのでした。それなのに、以前のほかの男にも「恋しい」などと言いました。が今から思えば何をいつていた事やら。」「将来こうしてあなたにお会いできる運命とは夢にも思わなかったものだから、私もほかの女性に「あなたの為なら死んでもいい」などと、たわいのない事を云っていたものでした」の意。既に過去に恋愛体験のある男女どうしでありながら、この今の恋を絶対化した切実な心情が、まことに力強くみごとに詠い出されている。また、第一〇五段は平中興女が病氣の際に祈祷した浄蔵と恋に陥った話である。浄蔵は人の口の煩わしさに耐えられず、鞍馬にこもって修行に精進するが、やはり恋しさに堪えられない。そこへ女から恋文が来る、それに惹かれてふらふらと都へきて、女に逢い、再び山に帰っていく。女から又歌が来る――。

さらに第一二二段は増基法師としの子の話、一二三段も増基と某女の話である。一六八段には遍照の子由性がその気もないのに、出家させられて、京へ通って遊蕩しているうち、親類の娘とねんごろの仲となったが、親に塞かれて、山にこもってしまう。或る日、女の兄が坊を訪れたので、こっそりとこの兄の

衣服に恋歌をかきつけておく。娘は兄の帰った衣服に恋人の歌を見つけて、男を惚んだ、という話である。この由性の放蕩を述べる箇所は、「京にも通ひて、しありきける」と、揶揄的な口吻が見えるが、娘との恋に至ると、それは姿を消し、尋常な恋愛の描写に終始する。

以上大和物語では僧侶の恋愛事件が四個所、教段にわたって記されながら、そこに僧侶の恋なるがゆえに特別罪悪視したあとはない。世人の口さがなさは僧侶だからこそという書き方なのだが、作者も世人に同調するわけではない。作者は、宣長のいうように、僧侶も恋の心は俗人と同一であることを自明の事として受入れているようである。

似たことは、平中物語十七段に就いても言える。男が前から通っている女の許へゆくと、女房たちの様子が変だ。前裁にかくれて見ていると、女房たちはこれも前裁の中の別の処に隠れている僧のもとへ来て、「早くお上りなさいな」など云っている。男は、

(僧を)とらへさせやせましと思ひけれど、わが来る事いよく
ばくもあらず、もとから来る人にもこそあれ、又わが後に
ても(自分ノアトカラ關係ガ出来タシテモ)、かう心うきにより、
けしからずさとやいはれむ、

などと思つて、ためらうのである。事もあろうに、僧に乗りかえられるとは、という口惜しさももとよりあろうが、自分より先の馴染みかもしれぬとか、後からにせよ、こちらが冷くして来たのだから悪い、と反省するところなどを見ると、忍んで来る僧をあたまから悪者扱いするふうには見えないのである。恋

仇の僧に対するこの気弱な「男」の対応は、俗人が恋敵に対するのとほとんど変わらないのではないか。

また宇津保物語では、千蔭の息忠こそは、まま母の讒言で父に疑われ、出家入山するが、鞍馬で修行した後、諸国を廻る途中、はからずも風に吹き上げられた幔幕の隙間から、あて宮の姿をのぞき見る。

こゝらの年ごろ、露・霜・草・かづらのねをときにしつつある時にはくちなはのとかげにのまれんとす、仏の御事ならぬをば口にまねばで、勤め行ひつる、仏のおほさんことおそろしく、など思ひかへせども、せんかたしらずおほゆれば、散り落つる花びらに、爪もとより血をさしあやしかく書きつく。

うき世とて入りぬる山をありながらいかにせよとかい
まもわびしき

(中略) いかでこのわが見し人みん、と思ふ心ふかくて、くらぶ山にかへりて、思ひなげく事かぎりなし。(春日詣)
ということとなって、熱心な懸想人の一人となるのである。道心堅固の修行者が、一目見た美女に心奪われ、散りかゝる様の花びらに指の血で恋歌をおくる、という趣向は、すでにして演出効果満点というべきであろう。その後、かれはさらに、あて宮を得る為、

ただこそその阿闍梨も大願を立てて、相伝の法を不斷に行ひ
加持したる水を硯水にして奉れたまふ。

つきにきと思ふ我が身のかなしさを君はいかでかこゝ
らとめけむ(菊の宴)

ともある。もちろん、彼は、「仏の御徳」なくて、念願は叶わない。これらの叙述の中には、「仏の思はん事怖ろしく」といった句はあっても社会的制裁を怖れる気持などはないらしい。彼のそうした欲望は是非なきものとして作者は認めているようだ。もっとも、恋愛という心理の内面に拘わる微妙な問題については、甚だキメの荒い表現しか出来なかつた宇津保の作者を相手にこの種のことを考えるのは、かなり困難な事ではあるのだが、この認容の態度には、大和物語に共通するものがあるとはいえる。

また、散佚した「かくれみの」は、松尾駿氏によれば、源氏物語以前に成立したらしいが、風葉集には、

ところどころ見ありき侍りけるころ、法師の女の手を
とらへて侍りけるに、仏のふ給ふやうにていひ入れ
て侍りける
かくれみのの左大将

たもてずてあやまつとがとみるときぞ教へし法もくやしかりける

とある。隠れみので身をかくした主人公が、法師が女を誘惑しようとしている場をのぞいて、僧の身で戒を保つことも出来ぬとは、仏法のために残念至極と歌で論ずるのである。この頃からすでに破戒僧が女を口説く場面が出来上っていたものとみえる。こうなると大和物語などには見えなかつた僧の恋に対する悪意がかなり露骨だといわねばならない。そしてそれを受けつぐものが、おそらくは住吉物語の六角堂の別当とか狭衣物語の威儀師の僧の類であろう。

現存本住吉物語では、継母は夫の中納言が姫君を入内させよ

うとすると、姫君にはすでに「六角堂の別当とかや、あやしの法師」が前から通っていると嘘をいって妨げる。欺かれてそれを真実と思い込んだ父中納言は、「あさましや、幼くより母におくれ、又乳母さへはかなくなりぬれば、果報なきものとはしりながら、あさましくて」と、あきれはてる。今の住吉物語が古本を改作した鎌倉以降の作物であり、この細部も語彙に中世の所作歴然たるものがあるから、六角堂の別当の件も平安朝のものに見えたかどうか問題はあろう。しかし、細部はともかくも大綱に於いてはほぼ古本を套襲しているというのが、現存本住吉について一致した見解であるようだから、この継母が入内をあきらめさせる為は、こうした中級の僧侶と関係が出来た、ということをお口実にしたことは、古本も同様だったのではないだろうか。この構想がさらに後の狭衣物語における、飛鳥井姫をさらっていこうとした悪漢威儀師の姿に変わり、また為仲集に見える、孤児の姫君を乳母を抱きこんで我がものにしようとする「ならの法師」の如きものにも通じよう。そこに当時の物語における発想の一類型を認めようとする森下純昭氏の説もあるゆえんである。さらに云えば、その延長線上に、中世の「袋法師」の如き、ポルノまがいのいかげしい作品が生れてくるのである。

肝腎の源氏物語には、好色の僧侶が全く顔を出さないのは、一つの問題とすべきかもしれない。源氏物語の僧たちは、横川の僧都のように、人間的で智徳すぐれているか、さもなければ沫香臭あり頑くかな人物が多い。僧の恋愛が幾多言い伝えられ世の中で、その事を材料に取り入れられなかったのは紫式部の潔

癖というものであろうか。彼女は日記に徹しても、かなり真剣に信仰を持つとうとしていたようである。主人公とその継母との不倫の恋という設定まであえてした紫式部のことだから、私ここで通俗的な道德の次元での潔癖をいうのではない。式部は恋愛描写に際して、終始厳格に肉の描写を避けた人である。僧侶の情事は、ひどく不気味でどろどろとした救いのない情欲を感じさせる、それを忌み嫌った、というふうにも考えたいのである。

六

ふたたび平安末期から鎌倉の説話にふれる必要がありそうである。右にのべた狭衣物語などにおけるこうした破戒無慚の僧のすがたは、やはり、基本的には狂騒的な平安後期の社会風潮によるものと思われるし、説話集はその手がかりとなるであろう。今昔物語集や宝物集・古事談などは、内容としては平安前期ないし奈良時代にまで遡るものも多いけれど、その脚色や表現はこの時代のものであり、素材の年代とともに、書かれた時点の事がらを語るところも多いと思う。

これらの説話集には、実に多くの僧侶の恋がおもしろおかしく語られている。道命阿闍梨と和泉式部(古事談)・馬内侍と覚運(發誓子四)・百姓の妻に忍んだ高観坊(沙石集五)・大納言の北方に懸想した玄寶(発心集)・東三条女院に浮名の立った和泉僧正(宝物集)・母を犯した明達律師(同上)・娘を妃した順源(同上)・乳母の母子共に関係した花山院(宝物集)・京極御息所を横取りした宇多法皇(宝物集)・妻子を蓄えた浄蔵(同) など

真偽とりまぜていろいろ例をあげているが、説話や歌をそのまま伝えようとすると古事談や袋草子などと、その行いを罪深い所業として強調する発心集・宝物集などの間には、その語り口にもおのづから差があるのは当然であろう。

また唱導の域をはるかに越えた今昔物語集には、靈異記の筋をひく悪行僧の話もあるが、逆に、仏の加護で良縁を得る僧の話も少くない。たとえば巻十六の第三十四語「元縁ノ僧、仕清水観音成乞食覺得便語」では、ある僧が清水に詣でて女に会いその誘うままに度々女の家に赴いて接待される。そのうちに、

此ノ女ヲ見ルニ、夫有ルトモ見エズ。此ノ僧、未ダ女ニモ触レザリケル僧ナリケレドモ、夜ル留リタル間ニ、此ク勲ロニ当レバ「此レ観音ノ給ヒタル也ケリト思ヒテ、此レ妻ニシテムト思フテ、夜禊カニ這寄リタルニ、女、貴キ人カトコソ思ツルニ、此ク御シケルナド云ヒテ、辞ル事モ无ケレバ、遂ニ近付キニケリ。

この女は、実は乞食の頭梁の娘であつて、この男も宿縁によつて以後乞食の仲間に入った、というのである。女の方は乞食娘では結婚に不自由なので、一計を案じたということであろうが、それにしても、童貞の僧侶が女と同衾するのに、特に「貴キ人」ならばともかくも、こうした通常の僧の身ならば、ほとんど男女共に抵抗感がないかの如くに語られている。

今昔物語集ではこの外にも、女の側から僧を誘惑する話が散見する。二十巻第六話「仏眼寺仁照阿闍梨房託天狗女來語」は天狗の女が仁照を誘惑しようとしたもの、それに続く「染殿后為天狗被燒乱語」も、金剛山の聖人が后に懸想し、恋死して天

狗と化し、后をたぶらかして白昼共寝をする話で、共に妖怪譚だから例外としても、後者の末尾に附した語は注目される。

此事極メテ便无ク憚有ル事也ト云ヘドモ、末ノ世ノ人ニ見シメテ、法師ニ近附カム事ヲ強チニ誠メムガ為ニ、此クナム語ルト伝ルトヤ。

中世の女訓ものには、多く女子が僧侶に接する際に嚴重に注意するよう教えているが、その淵源は靈異記をはじめとして浄蔵やゑしう以来遠く深いのであつた。

また、女の側から積極的に働きかけた場合には、僧侶であっても必ずしも重い仏罰は蒙らないという考え方もあつたらしい。巻十七、第四十四話「僧依毘沙門助令産金得便話」では、ある僧が、外出先で美しい童に会い家に伴い帰る。同衾してみると、男ではなく女だと分る。僧はあわてて、女では人の目がうるさいし、「三宝ノ思シ食サム所モ怖シクコソ」と云うと童女は「三宝ハ其ニ心ヲ発シテ犯シ給フ事ナラバコソハアラメ」と云つて笑うのである。また、逆に僧の恋愛を、男を拒否できない女の心弱さの原因があるかということもある。同じく、巻三十、第三話には前述の大和物語に見えた浄蔵と中興女の話であるが、その末尾に、

此レハ女ノ心ノ極テ慥キ也。浄蔵心ヲ尽シテ言フトモ、女ノ用イザラムニハ叶フ可カラズ。然レバ心柄女ノ身ヲ徒ラニナシツル也トゾ、古ノ人云縁ヒケルトナム語リ伝ヘタルトヤ、

すこぶる男性本位の勝手な云い草ではあるが、彼此思い合わすれば、恋愛における女の主体性ないしは自発性というものが現

実にあり得るといふことが考えられていたとは云えるだろう。ただそれは一般的には好ましいことではなかったのだ。「親に知られず、さるべき人もゆるさぬに、心づからの忍びわざし出でたるなん、女の身にはますことなききずとおほゆるわざ」(源氏物語、若菜七) だという、朱雀院の言葉は、そうした通念の要約とも云える。

小論で私が述べたかった主眼は、この当時の文学作品に徴してみれば、人々は僧侶の恋愛に対してすこぶる寛大で、多くの場合にそれを人間にとつての皮肉な必然として笑って受け入れているということであり、仏教的な戒律に拘束された形跡はなほだ乏しいということである。もっともそれは、本来文学というものがいかなる人間に対しても、かくあること自身を尊重し、そのまま受け入れる本質をもっている為だ、とも云えば云えるかもしれぬ。とすれば本論はもともと、論は堂々めぐりするばかりで、空虚なものであるほかはない。

しかし、冒頭に記した宣長の言葉にもあるように、具体的な日本の古典文学作品が、そうした人間の自然的側面を、彼がまわっている衣裳にかかわりなく自由無礙に描き出すものであるとすれば、それは粗い言い方をすれば逆に日本古典が純粹に文学であることのしるしといえるかもしれない。中国詩集の釈家・梵門の詩が俗を排し色を斥けて、解脱清澄の境を強調するものとすれば、それは正に宣長の云ったとおり、「法師ならむからに俄に俗と人情と変るべきものにあらず」という点を無視し去った偽善と虚飾とだとも、一方では非難できる。ただ、前にも云ったように、こうした云いかたが、人間性の積極的な意志

の力による上昇志向の側面を軽視する片手落ちを免れないものであることも確かであり、平安朝の文学がそうした弱点を持っていることもまた否めない。僧侶の恋を扱う態度は、はしなくもその事を物語っているのである。

なおこの問題については、釈教歌とか往生伝その他より仏教的立場の強い作品の性格を一方で考えながら論を進める必要があることを痛感すると共に、さらに問題の根底には仏教教理や教壇自体の内部に潜む要因も多大と思われるが、私は、その点について、十分に語る力がないことを遺憾とする。

注

- 1 角田文衛「藤原高子の生涯」(『王朝の映像』所収)
- 2 辻善之助「日本仏教史、中世篇Ⅰ」
- 3 日本高僧伝要文抄浄蔵条。
- 4 拙著「花山院の生涯」
- 5 五来重「高野聖」
- 6 平田俊春「平安時代に於ける寺院統制の弛緩」(『平安時代の研究』所収)
- 7 拙稿「仲文集試論」(『王朝文学の研究』所収)
- 8 榮花物語かがやく藤室。
- 9 松尾路「平安時代物語の研究」
- 10 森下純昭「古本佳吉物語と狭衣物語―飛鳥井の物語との関係―」語文研究三五号昭和四十八年五月
- 11 たとえば、「乳母のふみ」に、「またいかなるひじり世に聞え高くて賢きありと申とも、むつびよりて法文聞かむなど、なれ近づく御事返々あるまじく候。(中略) かりそめにも此ひじりこそかの髻依僧など人にはれさせ給ひ候まじく候」とあり、「乳母のさうし」にも似た主張がある。

〔附〕本稿の執筆については、同僚の岡村繁・田村圓澄・伊原照蓮各教授より種々御教示を得た。記して感謝の意を表する。